

宝の海から

白浜で出会った生きものたち

57

京都大学助教授 久保田 信 (京都大学 瀬戸臨海実験所)

冬季の田辺湾に大形クラゲ

日本近海で見られる大形クラゲといえば、最大で直径1.5m、重さ150kgに達するエチゼンクラゲだが、近年、京都大学瀬戸臨海実験所近くの北浜には、わが国の太平洋岸で見られる大形クラゲのエヒクラゲが数個体漂着している。

1993年以降7例のみである。93年12月5日に、阪田で初めて1個体が浮遊しているのを網で捕獲した。ずりりと手応えのある傷んでいない個体だった。この個体は最大に近く、傘径は45cmもあった。

この時の状況を、不思議な現象も含めて本連載の10回で紹介している。

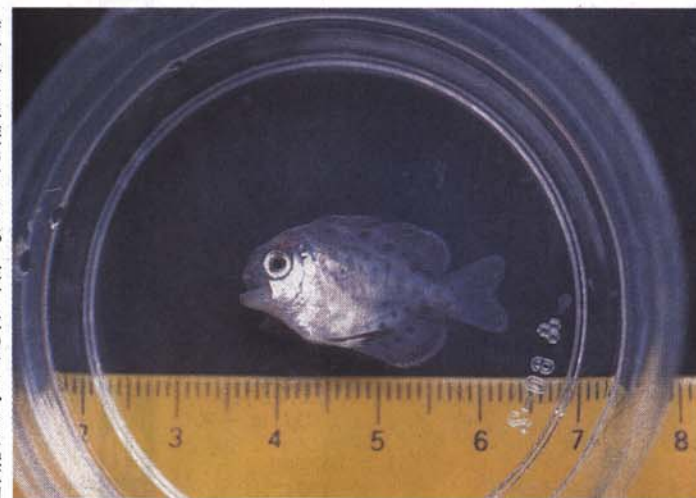
17日付の紀伊民報で掲載されたように、白浜町の真鍋さんと田辺湾入り口付近で、貝類の採取中に発見して瀬戸臨海実験所へ届けてくださった。

このクラゲは傘径25cmとエチゼンクラゲに及ばないが、太平洋岸で見かけるクラゲの中ではイボクラゲに次いで大きい。外形はイボクラゲと類似する。

『エヒ』と『イボ』2珍種



田辺湾でまれなエヒクラゲ (2001年5月18日採取)



エヒクラゲの口腕付近に生息していた稚魚(イボタイの1種)と等脚類の1種



（阪田を浮遊していた。以前のサイズと比較的田辺湾での他の記録大形であった。この他に田名瀬さんによると、は、南部町界の刺し網に02年11月に2回と、2002年10月に2回と、2002年12月に2回と、田名瀬さんが発見している。いずれも傘径30cm前後の個体が発見されている。

網にかかった個体は両方ともやや小形で、傘径が21cmと26cmだった。以上のように、イボクラゲは冬季に限って発見されている珍しい種である。古くから勤務されている瀬戸臨海実験所の他の職員たちもイボクラゲに遭遇したことはないという。山路先生の報告でも、本種が大変まれだと記されている。冬季の強風と波浪による吹き寄せで、外洋からイボクラゲが田辺湾に偶然運ばれてくることはそう頻繁には起こらないだろう。

イボクラゲの生活史は、故杉浦靖夫先生が1961年に、神奈川県三崎で採取した雌が保育していたアラヌラを取り出し、実験室で見事にポリプに育てた。ポリプからは若いクラゲであるエフィラを遊離させることも成功し、クラゲをしばらく飼育して成長過程を調べた。20年以上前だが、当時、獨協大学に勤務さ

田辺湾周辺では、過去10年余りで、わずか3個体だけ発見されたものの珍種である。田辺湾産のプランクトン相をまとめた故山路勇先生の1958年の瀬戸臨海実験所欧文報告でも、まれだと記されている。最初に遭遇したのは2001年5月18日、田辺湾内で院生の河村真理子さんと一緒にクラゲ類の研究でプランクトンを採取中、実験船ヤンチナ号の傍らを浮遊している新鮮な個体を探取した。エヒクラゲの和名の由来は、エヒが口腕に住みついていることにちなんでいる。この個体にはエヒ類はいなかったが、同じ甲殻類の等脚類がいた。また、イボタイの稚魚も共生していた。

日本の太平洋沿岸で最大となるイボクラゲの田辺湾の発見記録も少ない。



イボクラゲのポリプはたった1個体のエフィラしかつらぬかない(京大瀬戸臨海実験所水族館の特集展示コーナーで)